食における『自然』とは何か？

2012 年 1 月 8 日(日)

司会・文責：堀越

1. 概要；
・参加者 15 名を迎えて、食における自然について考え、議論した。私達が普段食品を語り、購入する際に考える「自然」とは何か。「なぜ自然が好まれるのか」について議論した。

2. 議論；
(0) 普段私達はどんな条件で食品を選んでいるのか？
・最初に下記条件だけを提示し、参加者にそのトマトを選ぶかを聞いたところ、下記結果であった；
(A) 1,000 円/kg～完全無農薬　2 名
(B) 700 円/kg～認可済肥料・農薬使用　9 名
(C) 500 円/kg～遺伝子組み換え(ビタミン添加)　4 名

(1) 経済合理性の他にどんな選択傾向があるのか？
・思考実験として、価格条件を外した下記条件ではどのトマトを選かを聞いたところ、下記結果であった；
(A) 完全無農薬～味・形状・色彩は多様性であり、購入単位内でもばらつき有　9 名
(B) 認可済肥料・農薬使用～所属している国家は人体に対し無害証明済み　1 名
(C) 遺伝子組み換え(ビタミン添加)～100 年後の世界で人体に対し無害証明済　4 名
・経済合理性以外の消費傾向は何か。ここまでの議論を整理すると、下記の２つの傾向に集約された；
① なるべくなら自然（野生）に近い食品を摂りたい
② 人工的操作(遺伝子組み換え)の危険性よりその食品を多く摂りたい
なるべく自然（野生）に近い食品を選びたいが価格を考えた結果から完全無農薬食品または認可済農薬使用食品を選択するグループと、自然に近いかどうかという点より価格を考えてより多くの食品摂取を選択するグループとに大きく分かれるようである。

(2) 食品に求める自然（人の手が入っていない）とは何か？
・私達が選択する傾向にある自然とはどういうものかを議論したところ、下記意見が出た；
① 農業を始めた時点から自然（人手介入なし）ではなくなったのではないか。
そういう意味では、もはや無人島にでも行かない限り、スーパーには真の意味で自然な食品はないはず。
② 普段私達が「食」を語る際に用いる「自然」という概念は、人間が人間に都合良く操作はしているが、同時に自然自身の継続可能性をも担保した、(ある意味では)人工操作の加えられた自然である。
③ 「人間は自然の一部である」から、人工操作があっても自然である。
☆「人間は自然の一部かどうか」は興味深い論点であるが、ここは一旦この議論は横へおいて、より自然に近いものを「野生」と呼び、議論を進めることとした。

(3) 食において野生が好まれるのはなぜなのか？
・食品を主観的に見て判断しているのではないかという意見が出た；
① キュウリでは、曲がったもの、真っ直ぐなものでは、曲がったものの方が野生的で感覚に合う。
② 柿では、種あり、種なしでは、種ありの方が感覚に合う。
③ 上記の志向性も単純に人の「慣れ」の問題ではないか。
・思考実験として、D) 遺伝子組み換えがより自由化され、タン需要を賄うため舌を３枚持つ牛を飼育されたらどうか？を聞いたところ、感覚として気持ちが悪いし、不気味に感じる、という意見が出た。
④ 「不気味」という観点から感覚的に選んでいるのではないか。
⇒１枚の舌を持つ肉牛と３枚の舌を持つ肉牛とでは、牛が人に割合近い分だけ、人間の形状と比較してより異なる方を不気味に感じる。一方で、蛸は、人に割合遠い分だけ、足が 8 本から 10 本へ増えてもあまり気にならない。
☆「不気味の谷」という概念がある。ロボットを人間に似せていくと、ある程度人間に似過ぎてくると不気味に見える現象を指す。ロボットは人工物であるため、似過ぎていない範囲が心地良い訳だが、野生物(食品)を見る際は、人間に似ていない(形状が離れていく)と不気味に感じるという意見である。
・「不気味さ」から遠いか(心地良いか)で私達は選んでいるのか。キュウリの場合は、真っ直ぐか曲がっているかが人間からの類似性では説明できないため、一つの見方でしかない。さらに議論を掘り下げたかったが、ここで時間切れとなった。

3. まとめ；
・「自然が良い」という自明として考えられていることを「不気味」という概念で説明しようとする考えはテーマの発案者にとって発見であった。だが、「単なる慣れ」という考えとの関係を掘り下げる必要もありそうである。もう一度掘り下げてみたいテーマである。

以上